

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

中村翼

【所属】(助成決定時)

大阪大学大学院文学研究科

【研究題目】

「宋元仏教の選択的受容と日本禅宗の形成」

【研究の目的】(400字程度)

12～14 世紀の日中交流(日宋・日元交流)史の主役は、貿易を担う商人(海商)と、貿易船に便乗して日本から大陸に渡った400人を越える留学僧(入宋・入元僧)、そして宋元より日本に迎えられた渡来僧である。彼らの交流を通じ、13世紀中頃以降、鎌倉・京都を中心に禅宗が隆盛を遂げるわけだが、日本「伝統」文化における禅宗の影響力の大きさを想起する時、同じ頃、日本禅宗が日中交流を通じて形成された事実は、注目に値する。だが、日宋・日元交流の盛況に注目が集まっている今日においてなお、日本国内の支配者集団の宗教政策や貿易船の往来状況が日中交流のあり方、そしてそれと併行して進展した日本禅宗の形成において及ぼした影響など、未解明な論点は少なくない。そこで本研究では、日中貿易史研究や日本中世国家の宗教政策論との接合を念頭におき、日本禅宗の形成史の再検討を試みる。

【研究の内容・方法】(800字程度)

13世紀後半～14世紀にわたる日本禅宗の形成史を考察する上で、禅僧をとりまく環境として、京都・鎌倉に所在する中世日本国の支配者集団の宗教政策と、交流の多寡を規定する貿易船の往来状況の変遷の実態把握が不可欠となる。そのため、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』(思文閣出版)、榎本涉『南宋・元代日中渡海僧伝記集成』(勉誠出版)、大阪市立美術館等編『書の国宝』所収の墨蹟目録を参照しつつ、『大正新修大蔵経』・『群書類従』・『五山文学全集』『五山文学新集』などに所収される史料を中心に、1240年代～1350年頃に活動した日本僧の年譜の作成を通じ、彼らを取りまく人脈(外護者＝政治権力や、師弟・交友関係)を整理した。それらの作業をふまえ、日本における禅僧集団の先駆けとして13世紀後半に急速に拡大した鎌倉禅の形成過程を、必ずしも禅僧に収斂していなかった13世紀前半の入宋僧が13世紀後半には日本国の支配者集団との結合を通じ、禅僧として結集していく過程として捉えた。その成果は、論文「鎌倉禅の形成過程とその背景」にまとめ、学術雑誌に投稿中である。また同時に上の作業は、僧侶の日中往来の年代把握を兼ねており、それを整理することで貿易船の往来状況を復元した。

また、14世紀に日本にもたらされた禅宗の内実や、入元僧・渡来僧を取りまく人脈をより詳細に把握するため、未翻刻史料の収集を行い、そのなかから鎌倉幕府の招請により来日し、鎌倉禅の中核を担った清拙正澄(1326年来日)・明極楚俊(1329年来日)の語録『清拙録』『明極録』(いずれも国立公文書館蔵)の翻刻を行った。また、五山に代表される室町期禅宗を支えた夢窓派の中心人物・義堂周信の日記『空華日用工夫略集』を調査・精読し、記事内容を編年でデータベース化した。しかしながら、これら個別の史料データを相互につきあわせ、分析する作業を期間中に行うことは出来ず、今後の課題である。

【結論・考察】（４００字程度）

まず、13世紀後半以降、鎌倉を中心的な拠点として活動した禅僧集団の形成過程を明らかにした。鎌倉禅形成の契機は、13世紀半ばの政変をうけた鎌倉幕府の宗教政策の転換、すなわち禅宗興隆政策の開始に求められる。禅僧集団の活動に対する幕府の公認と、貿易の隆盛を通じた僧俗の中国熱の高まりをうけ、禅僧たちは、中国風の仏法として自らを肯定的・積極的に位置づけるようになり、宋よりの渡来僧を求心核とする「鎌倉禅」が確立したのである。

中国風の仏法としての自己認識は、禅僧集団のその後を大きく規定することになる。本研究では、13世紀末から14世紀中頃における日中間の僧侶の往来状況が、日元間の軍事的緊張や鎌倉幕府滅亡後の政治的混乱（南北朝内乱）をうけ、1270・1280年代、1300年代初頭、1330年代の断絶を含むことを確認した。これは日元交流における僧侶の出国・帰国のシーズンの偏差を示唆するもので、日元間を結ぶ僧侶の人脈や元仏教の日本への移入のあり方を根底から規定したと予想される。ただし、その具体相の解明は今後の課題となる。